

レポートのためのヒント (492)

I. 環境文学とは何か。(講義)

II. 環境文学としてのジャン・ジオノ「木を植えた男」。(アニメーションビデオ)

I. 環境文学とは何か

1970年代以降、環境問題に対する関心の高まりや、地球環境が危機的状況にあるとの認識から、アメリカ合衆国で「**ネイチャー・ライティング**」(自然誌)という新しい文学ジャンルが誕生した。自然誌とは、自然をめぐるフィクションというぐらいの意味だが、環境文学という名に値するためには、単なる伝統的、写実的な自然描写ではなく、現代の環境問題に対する反省や意識に裏打ちされていることが必要である。

批評の分野でも、「**エコクリティシズム**」(環境文学研究)の動きが起こってくる。原則的に言えば、どのような文学作品にも人間だけではなく環境が描かれ、そこに環境が存在する以上、その作品は我々の環境意識と何らかの形で関連を持つ。しかし、「わたし」自身に一貫したエコロジー理論がないと、作品研究は単なる自然賛美に帰してしまう。確かに自然賛美もひとつの立場ではあるが、それは何もエコロジーの専売特許ではなく、もともとルソー以来ヨーロッパのロマン主義が繰り返し主張してきた思想である。環境文学というからには、そこに、現在の環境問題に対する我々の意識や立脚点が備わっている必要がある。

日本では、篠田知和基が「環境文学から見たフランス文学」という論文のなかで、環境文学を次のような枠組みで捉えようとしている。

「環境文学は、ソロー (ヘンリー・D・ソロー (1817~60)。『森の生活』等ネイチャー・ライティングの祖とされる。) のタイプの自然賛美、あるいは自然体験と『苦海浄土』(石牟礼道子)のタイプの公害告発を含む。

これまでの議論からすれば、上記のような定義が一応は可能だとしても、環境文学とは何かを考えることは、ソローのような単なる自然賛美に終始することではなくエコロジーのあり方そのものを問いたたすことであり、とりわけエコロジーが近代以降の人間中心主義とどうかかわるのかを考えることに他ならないといえる。

この点については、リュック・フェリの著書『**エコロジーの新秩序 樹木、動物、人間**』(加藤宏幸訳、法政大学出版局、1994)が示唆的である。彼は、現在のエコロジーを次の3つに分類する。

1. 人間中心主義的エコロジー
2. 功利主義的エコロジー
3. いわゆるディープエコロジー

1. 人間中心主義的エコロジー

自然保護が行われるのは、自然自身のためというよりは、むしろ人間の幸福と繁栄(あるいは自己保存)のためである。つまり、「保護しなければならないのは今でもまだ人間であるという考えから出発」している。「自然が考慮の対象となるのは」、「<間接的>でしかなく、それは「<ヒューマニズム的>、さらに<人間中心主義的>立場からである」

2. 功利主義的エコロジー

ここでは人間中心主義は放棄され、人間と動物は同等の権利を持つものとして扱われる。功利主義とは、「世界の苦しみの総量を最大限に減少させ、できる限り満足の量増大することを目指す」考え方であるが、この原則の対象には人間だけでなく動物たちも含まれる。人間も動物も「喜びや苦しみを感ずるすべての存在は、権利の主体とみなされ、そのように扱われなければならない。」(動物の形而上学的、法律的地位)

3. いわゆるディープエコロジー

人間と動物だけではなく、さらに植物や鉱物も含めて自然そのものの権利を要求する。この立場は、アメリカ合衆国のアルド・レオポルド、ドイツのハンス・ヨーナスらに代表される。彼らは、時には暴力的な実力行使に出ることもある。

フェリは「人間中心のエコロジー」を自分の立場として選んでいる。しかし、人間中心主義には不都合もある。「ヒューマニズムの道徳的伝統が、ルネッサンス以来、われわれと同等であるとみなされた他の個人に対する契約の<契約>モデルにもとづいてわれわれの倫理的な義務を考え出したので」、権利、義務、正義などの重要な概念の有効な範囲が人間に限定されてしまったのである。しかし、動物や自然を主体にすえることには無理がある。人間とそれ以外の自然、特に動物との間には、基本的に人間が自由意志(実践的理性)を持つという点で断絶がある。この断絶なしには人間社会も文化も人間存在そのものも成立しないからだ。したがって自然を主体とみなすことはできないが、倫理的義務を人間だけに限定する従来の人間中心主義のままでは環境は救えない。ここでは、動物の持つ「曖昧さ」に着目してみることができる。デカルト以来われわれは、動物を「倫理的意味を全く持たない単なる<物>として扱うことが<許されて>」おり、したがって動物を物として破壊することが可能である。(デカルト的ヒューマニズム、主体の形而上学)しかし、我々は、動物は「人間に類似している」と考えるがゆえに、これを虐待してはならないと考える。あるいは、ユダヤ思想のなかにある「人間の品位を落とさないために動物を尊重する」といった考えを採用しても良いかもしれない。

フェリのこうした考えに対して、仏教的アニミズムから自然を考えてみることもできよう。しかし、いずれにしても、いまだにエコロジーを裏付ける十分な形而上学的根拠が確立されているわけではない。